様式２

# 研究計画書

| 研究者：加藤　茜　　所属部署：聖隷袋井市民病院　看護部 |
|---|
| 研究テーマ<br>　A 病棟における看護師が家族に行っている具体的説明<br>　―臨死期に焦点を当てて― |
| 研究の背景・意義（先行研究及び関連文献の検討を含めて記述する）<br>　看護師として 3 年目を迎えた春、自身の祖父を自宅で約 1 ヶ月間介護し、在宅で看取ることを経験した。自身や自身の家族は看取りの場面において、自分たちが祖父に対してできることをしたと感じ、本人と家族が望む形で看取ることができたという実感をえられた。その実感は祖父の死への受容を良好に行うことにつながった。祖父を看取った体験から、看護師として、家族が後悔しない看取りを迎えることが出来るような関わりをしたいという思いが芽生え、終末期や家族看護について興味、関心が強くなった。<br>　その一方で、患者 A さんが臨死期を迎えた時に家族が死を受容できていないと感じる事例を経験した。A さんは他病院から自宅へ戻るための加療目的で当院に転院したが、転院後に全身状態が悪化した。私は、準夜帯で家族が面会に来た際、現状を伝えた。しかし「昼間は目が開いていた」など、「良い」と捉える説明のみを注視しているようだった。私は家族が患者の状態への理解が不十分であると感じていた。家族は付き添いを希望せず、帰宅した。次の日に再度面会に来る予定となっていたが、深夜帯で更に状態が悪化し看取りとなった。看取りの際に家族からは「嘘ですよね、元気になると思っていたのに。今から何とかならないですか。」との発言が聞かれた。この経験を振り返り、自分が行った説明は、家族が患者の予後の短さを理解するには不十分であったと感じた。また、入院日数が 11 日と少なく、状態が悪化するまでの期間が短かった。そのため、私が家族とかかわることが出来たのは臨死期であった。短い期間でも家族が患者の死を受け入れられるようにするための支援が必要であり、終末期の中でも臨死期におけるA病棟の看護師が家族に行っている具体的説明について明らかにしたいと考える。<br>　村上ら（2013）は家族に事前の具体的説明が行われたことで死への受容を良好に行えていることを明らかにした。また、三島ら（2004）は、繰り返し事前の病状説明が行われることによって、家族は病状悪化を「急変」と受け止めずに「自然経過」と認識できると述べている。<br>　当院は 150 床の中小規模病院であり常勤医は少ない。夜間や休日は近隣の病院からの派遣医師が当直を担っている。そのような中で看護師が患者、家族に対し、看護の視点で現状や今後の予測について説明することも多い。また、新型コロナウイルス感染症（COVID－19）により病院での面会が制限されている中で、家族が患者に会えず、病状や現在の状況について知り、患者の状態を実際に目で見て感じ取る機会は減少している。そのため、看護師は、終末期の患者の家族に対して、少ない面会の機会の中で家族と関係性を作り、患者の状態を、家族へ伝える役割がある。<br>　福島ら（2011）は臨死期において看護師は患者、家族への共感や、患者、家族の尊厳を尊重することを大切にしており、患者、家族へ支援において意識や思いが強いと述べている。また、岡林ら（2017）は予期せぬ死を経験した家族の悲嘆へのケアとして、家族との信頼関係を作つくるケア、患者、家族の支援者としてのケア、家族の死の受け止めを支援するケアが特徴としてあげられることを述べている。齋木ら（2015）は臨死期における在宅終末期がん療養者の家族介護者への支援においては、臨死期の家族が看取りの過程における様々な体験を乗り越えるとともに、家族がその後の人生も主体的に生きていけるよう、成長のプロセスを支えることが重要であると述べている。臨死期 |

における家族への看護や家族へのケアの内容については研究がなされているが、看護師が実際に行っている具体的な説明の内容については研究がされていない。家族が後悔しない看取りを迎えられるために、患者の死を受け入れられることが大切であると考える。臨死期においてＡ病棟の看護師が実践している家族への具体的説明について明らかにし、家族が死を受け入れられるようなかかわりについて検討する。

研究の目的

Ａ病棟の看護師が実践する臨死期における家族への具体的説明について明らかにする。

研究方法

1.　用語の定義

・終末期：治療を行っても疾患の治癒が見込めない状態で死に至るまでの時間が限られていると医師から判断された状態。

・臨死期：死亡診断からさかのぼって５日前まで。

2.　研究デザイン：質的記述的研究デザイン

3.　研究対象者：Ａ病棟に勤務し、リーダーを経験している看護師４名

4.　研究期間　聖隷袋井市民病院看護部倫理審査委員会承認後から2023年９月末日まで

5.　データの収集方法・内容・手順（調査用質問紙・インタビューガイド等を添付する）

研究対象候補者に対し、本研究の意義、目的について口頭で説明する。同意を得られた研究対象候補者に対し、研究目的と意義について口頭及び文書（研究の説明書・同意書　様式3）で説明し、同意書の提出をもって研究参加者と定める。インタビューはプライバシーの保持が可能な状態で自由回答法による半構造化面接を実施する。面接は原則として一人15～30分実施し、研究者が作成したインタビューガイド（資料1）に基づいてインタビューを行う。インタビューの内容の録音については研究参加者から同意を得たうえで行い、面接の実施に際しては面接の練習を数回行い、研究対象者へ面接を実施する。

6.　データの分析方法

・本研究は内容分析の手法をもとに、得られたデータを帰納的に分析する。

・面接で得られた全データから逐語録を作成し、研究対象者が研究目的について語られた部分を抽出する。前後の文脈が損なわれないよう簡潔にした表現にまとめコードとし、意味内容が類似しているコードを集め抽象度を上げ、サブカテゴリ―、カテゴリーの順に分類し、本質的な意味を表す。

・分析に際して質的研究の経験者の指導を受け分析内容の信頼性の確保に努める

倫理的配慮

1.　研究対象者の保護

本研究は、自由意思に基づく研究参加であること、参加しないことによる不利益のないこと、プライバシーの保護、匿名性の遵守、面接での収集情報は研究目的以外には使用しないことについて、口頭及び文書を用いて説明し、十分な理解を得た後「同意書」への署名を依頼する。研究参加者より研究参加に同意を得た後に研究参加の同意撤回の意思があった場合は、研究責任者に直接申し出たうえで「研究撤回書」に署名を依頼する。

2.　データおよび個人情報を含む情報の保護についての具体的方法

1）研究者は個人のプライバシーの保護と個人情報に注意を払い、面接は個室で行う。収集したデータは匿名性を守り、研究目的以外には使用しないことを約束する。また、個人が特定されないよう個人名・施設名はコード化しデータとコードリストは別々に保管する。面接に関するデータ・同意書は鍵のかかる場所に別々に保管する。

研究終了後は 5 年間データを保管した後、録音媒体内の面接データ及び電子媒体は消去し、面接使用した紙媒体のデータや、同意書はシュレッダーにて破棄する。

2) 本研究では研究参加者が経験をもとにした事例に関して語っていただく場合もあるため、個人が特定されないよう匿名化し調査を行う。

3. 情報の開示

1) 研究対象者本人が情報の開示を希望する場合は、原則的に結果を開示する。

2) 研究対象者本人が情報の開示を希望しない場合は、研究参加者から除外する。

3) 研究対象者以外が情報の開示を希望する場合は、原則的に結果を開示しない。

同意書の手続き

本研究は、自由意思に基づく研究参加であること、参加しないことによる不利益のないこと、プライバシーの保護、匿名性の遵守、収集情報は研究目的以外には使用しないことについて、口頭及び文書を用いて説明し十分な理解を得た後「同意書」へ署名を依頼する。研究実施に際しては、聖隷袋井市民病院看護部倫理委員会において、承認を得ている。また、研究対象者により研究参加に同意した後に研究参加の同意撤回の意思表示があった場合は研究責任者に直接申し出たうえで「同意撤回書」に署名を依頼する。

今回、研究結果を、第 14 回せいれい看護学会学術集会で公表するにあたり、既に研究参加者へ説明した同意書の内容と異なることになる。そのため、「研究結果の公表についての説明書・同意書」を用いて、研究対象者 4 名へ結果の公表について口頭と文書で説明を行い、新たに、同意書を取得する。(同意書様式4)

結果の公表予定

本研究結果は、第 14 回せいれい看護学会学術集会で公表予定である。公表の際は、研究参加者の個人情報は保全する。

引用・参考文献

1) 村上真基, 山本直樹, 小林友美, 清水芳, 佐藤祐信:腹部急変で迎えた末期がん患者の看取りに関する後ろ向き研究,日本緩和医療学会誌, 8(2), 211-216,2013

2) 三島信彦, 青木ひふみ, 日比野美紀, 大橋洋平, 渡邊正, 山本直人:新設緩和ケア病棟における「急変」についての検討,日農村医会誌,53,464,2004

3) 福島佳代子, 松本美保, 奥川麻実,他 4 名:A病院における臨死期の看護の実際. 東京医科大学病院看護研究集録,32,5-8,2011

4) 岡林志穂, 森下利子:救急外来で予期せぬ死を経験した家族の悲嘆へのケア,日本救急看護学会誌,20(1),1-9;2017

5) 齋木千尋, 伊藤絵梨子, 田高悦子,他 4 名:訪問看護師の捉える臨死期における在宅終末期がん療養者の家族介護者の体験と支援に関する質的研究,日本地域看護学会誌,18(1),56-64,2015

研究計画書の提出日　2023 年 5 月 18 日

研究計画書の再提出日　2023 年 5 月 23 日